

## 平城宮第一次大極殿院地形 と回廊基壇の復原

はじめに 第一次大極殿院の地形は、『平城報告XI』（奈文研1982、以下第一次大極殿院の時期変遷はこの学報に従う）で初めてその概観が示され、1993年には第一次大極殿院地形復原案1/100模型が製作された。2001年度は、I-3期の一本柱塀の遺構を検討し、大極殿院回廊と広場の地形復原案を提示した（『紀要2002』）。2001年度案では、東面回廊の基壇は二箇所の屈曲点をもつ折れ線状に南から北に向かって高まり、北端の回廊北東入隅で基壇高が最高1.7mに及ぶと想定された。大極殿が建つ壇と大極殿院南半の広場を結ぶ斜路には、東面回廊際に亀腹状磔敷があり、従来の復原案よりも斜路の幅が狭いと考えられた。今年度は、2001年度案の検討をさらに進めて、北面回廊付近における大極殿院内外の地表面高と、磚積擁壁および斜路周辺の地形、南面回廊の基壇及び周辺地形について検討を加えた。なお、今年度の研究成果の一部は平成14年11月1日の「地形地表の仕上げに関する研究会」において発表した。

**北面回廊付近の大極殿院内外の地形** 2001年度の検討の結果、大極殿院の北面回廊は南側で約1.7mの基壇高を持つと推測された。そこで北面回廊北側の基壇高を復原するために、I期の地表面の復原を試みた。北面回廊の雨落溝は、回廊部分の遺構検出面が平坦であるにもかかわらず、北面回廊南側でしか検出されていない。I期の北面回廊北側の地形は南側より高く、それがII期以降に削平されて雨落溝が失われた可能性がある。

今年度は、北面回廊北側の地表面復原のために北面回廊北側にあるI期の掘立柱建物の柱掘形に着目した。北面回廊の北約10m、大極殿院の南北中軸線から東に約50mの所にI-1期、I-2期の掘立柱建物の遺構が重複する。これらの柱掘形は、平面が1辺1.2~1.6mの隅丸方形で、深さが遺構検出面から約30cmしか残らない。これは柱掘形の深さとしては浅すぎるので、北面回廊の北側ではI期の地表面が50cm以上削平されたと考えられる。

一方、北面回廊の南側では北面回廊の南雨落溝と広場側の磔敷が検出されていることから、遺構検出面はI期の地表面にほぼ等しいとみなせる。北面回廊の北側で地表面が50cm以上削平されているとすれば、回廊の基壇高

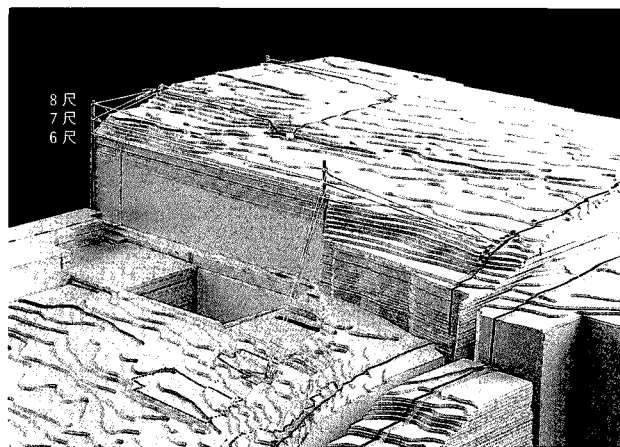


図19 遺構模型（磚積擁壁付近を南東から撮影）  
磚積擁壁高さ6尺、7尺、8尺を糸で表現

は南側で1.7mの場合でも、北側は1.2m以下に復原される。

今回の検討により、北面回廊の南側は北側よりも地表面が低く、基壇高が高いと考えられた。こうした地表面の標高差が大極殿院の設計に伴う意図的なものなのか、大極殿造営以前の地形の傾斜によるものなのかは、さらに検討を要する。回廊東北隅の外側の地形の納まりを東面回廊外側の地形とあわせて検討するなど、大極殿院内外の地形検討を更に進める必要がある。

**磚積擁壁付近の地形** 大極殿院の北3分の1は、大極殿が建つ壇が一段高く造成され、壇の南正面は磚積となっていた。壇上と大極殿院南半の広場とは、磚積擁壁の東西に設けた斜路で連絡されたと考えられている（『平城報告XI』）。今年度は、遺構検出面の模型を製作し、磚積擁壁の高さ及び斜路の形状を検討した（図19）。

磚積擁壁の高さの復原にあたっては以下の事を前提とした。①磚積擁壁の上端は東西方向水平とする。②大極殿南端から磚積擁壁上端までは一定勾配とする。

磚積擁壁位置での壇上下の遺構検出面の標高差は6尺以上あり、大極殿基壇前の旧地表面と壇下の広場との標高差は8尺以下である。したがって、磚積擁壁の高さは、6~8尺の範囲におさまるものと予想された。今回は、磚積擁壁上端から大極殿前面の範囲で磚積擁壁の鉛直高さが6尺、7尺、8尺の場合に想定される地表面と遺構検出面とを比較してみた。その結果、擁壁の高さが6尺の場合は想定される地表面がI期の遺構検出面よりも低くなる。一方、擁壁の高さが8尺の場合は、擁壁の上端と東面回廊西雨落溝との標高差が80cmほどとなる。この標高差を東面回廊西側の亀腹状磔敷の傾斜で吸収すると、

亀腹状礫敷の傾斜が急になりすぎる。これらの理由から、磚積擁壁の高さは7尺前後とするのが妥当だろう。

また、大極殿周辺の地形と斜路の形状について検討した。大極殿周辺の地形では、A；最小限の稜線で構成される場合、B；大極殿のまわりに一段高い壇をつくる場合を想定した。斜路はa；南から北へまっすぐのぼる形状、b；側壁に沿って曲がりながらのぼる形状、を考えた。図20に、それぞれの場合を組み合わせたA-a案、B-b案の地形模式図を示す。

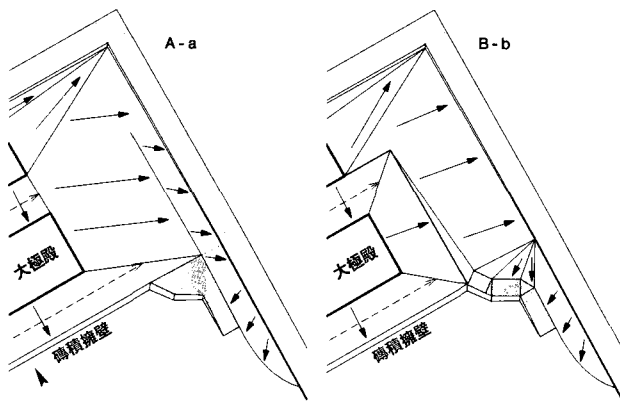


図20 大極殿周辺および斜路地形模式図  
矢印が地形の下がる向き、破線が水平を示す  
(財)文化財建造物保存技術協作成図を一部改変

**南面回廊北側の地形** 南面回廊の北側は、大極殿院の中でも特に遺構の残存状況がよく、大極殿院の様相を解明する多くの手掛りを残す。建物の周囲ではI-1期の地表面である下層礫敷や、I-2期に東西溝SD5590Aから南面回廊の間の盛土上に敷かれた中層礫敷が検出されている。そこで今回、建物周囲の礫敷面および雨落溝から、I期の回廊北側の地形を検討した(図21)。

南北方向の地形は、下層礫敷上面・中層礫敷上面の標高から復原した。I-1期の南面回廊北側は、大極殿院南北中軸の下層礫敷上面の標高によれば、磚積擁壁前面から南面回廊まで南下がりの地形だったと考えられる。I-2期には南面回廊の北約20mに東西溝SD5590Aを掘った。I-2期中層礫敷上面の標高は東西溝SD5590Aから南門にむけて南に5cm上がる。溝から南門まで南下がりだったI-1期の地表に盛土をして南上がりの地形にしたと考えられる。

東西方向のI-1期の地形は、南面回廊の北雨落溝の標高から復原した。溝底の標高は南門から東に10cm下が

り、東楼増築部ではほぼ水平で、さらに東面回廊にむかって13cm下がると考えられる。東楼増築部で検出された北雨落溝の深さは約5cmなので、溝底の標高から5cm上を当時の地表面と想定した。I-2期の地形は、中層礫敷上面の標高から、南門から東楼増築部まではほぼ水平で、そこから東面回廊に向かって31cm下がると考えられる。I-1期、I-2期とも大極殿院の南北の中軸をわずかに高くして東西に下がる地形が想定された。

**南面回廊南側の地形** 南面回廊の南側は後世の削平が著しく、I期の地表面を示す礫敷面などの遺構が失われている。I期の地形は、南面回廊を縦断する暗渠SD7807(I-1期)および木樋SD5561(I-4期)と北雨落溝の標高から復原した。暗渠SD7807は南面回廊と南門との取り付き部分で検出され、溝底の標高は回廊の南側では北側より38cm低い。木樋SD5561は回廊の東南入隅から南へ抜けており、溝底の標高は回廊の南側では北側より31cm低い。これらの溝底の高低差が、南面回廊南北の地表面の高低差を反映していると考えた。東西方向の地形は、回廊南側の東西暗渠(I期)の底レベルから、南門から東楼増築部までが水平で、そこから東面回廊に向かって16cm下がると考えられる。

**南門の基壇** 南門では、北側の地覆石抜取痕跡が検出されている。この抜取痕跡は、南門の東北隅、西北隅にL字形に残存する幅60cm深さ20cm程度の溝状の遺構で、I-4期の地表である上層礫敷面から掘り込まれる。地覆石を据え直した痕跡は確認できず、南門基壇はI-1期のものがI期を通じて存続した可能性が高い。南門の基壇高は北面階段の遺構から復原した。北面階段の出は、最下段踏石の抜取から3尺と想定され、階段の石の構成と勾配から、南門の基壇高は北側でI-1期の地表面から3.22尺と復原された。I-2期には南門際の盛土で地表が8cm上がり、基壇高は2.95尺となる。

**南面回廊の基壇** 南面回廊の基壇は、南門との取り付き部の納まりが問題となった。回廊の基壇は南門より低いため、南門際で回廊基壇を階段状に上げて段差を吸収する復原案も示されている(『平城報告XI』)。今年度は、根石の標高から礎石の据付を検討し、南門から東面回廊にかけての南面回廊の基壇高を復原した。

南面回廊側柱の礎石は全て抜き取られているが、根石は各所に残存する。根石は拳大の玉石で、礎石抜取穴に

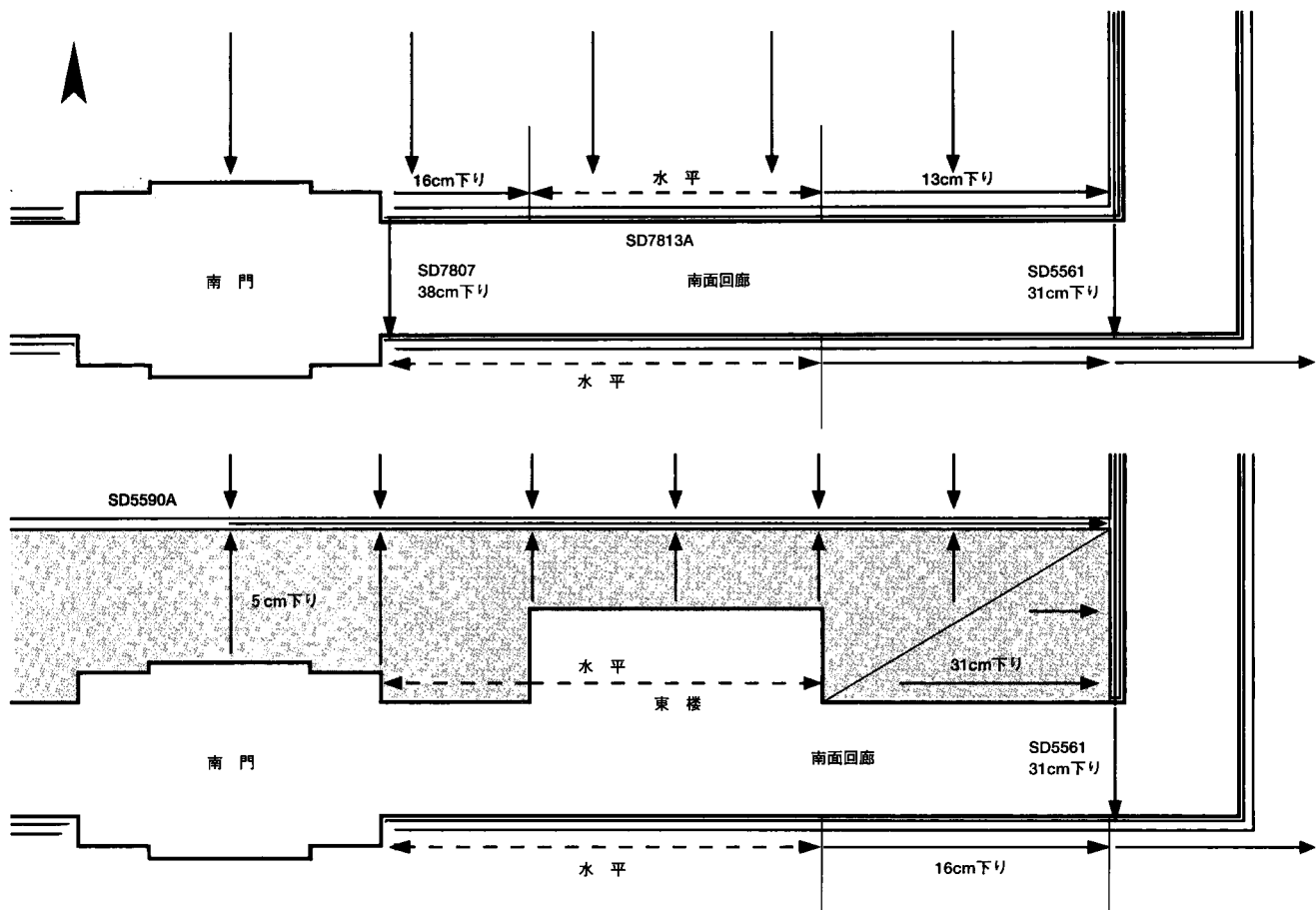


図21 南面回廊周辺地形模式図 上：I-1期 下：I-2期  
矢印は地形の下がる向き、破線は水平方向を示す

椀状にならぶ。礎石抜取穴中心部の玉石上面の標高は、東楼増築部から東では同じ高さを示すが、東楼西際から南門に向けて徐々に高くなり、最も南門寄りの根石は残存しない。したがって、回廊の基壇上面は東楼増築部の西際から南門にむけて徐々に上がり、一段高い南門の基壇上面に取り付くと考えられる。東楼増築部から東の回廊基壇上面は水平と考えられる。基壇上面の標高は、礎石根石の約60cm上に復原した。I-1期の基壇高は東楼増築部の北側で1.85尺となる。回廊北側では前述の通り地表面が大極殿院南北中軸から東に下がるため、基壇の見かけの高さは回廊東南入隅が高くなる。

南面回廊の北側では地覆石抜取痕跡が検出されている。この抜取痕跡は、南面回廊の北側に残存する幅70cm深さ10cm程度の溝状の遺構で、上層礫敷面から掘り込まれる。南面回廊の基壇も南門同様I-1期のものがI期を通じて存続したと仮定すると、I-2期には盛土の分、北側の基壇の見掛けが低くなる。(ただし2002年度の西楼の発掘によればI-2期に基壇を改修した可能性もある。)

東西楼の基壇 東西楼の基壇上面は、東楼の内部の礎石

建柱と東楼南側の回廊側柱の礎石にともなう根石の標高がほぼ等しいことから、南面回廊と水平と考えられる。基壇の地覆石抜取痕跡は東楼では未検出だが、2002年度の西楼の発掘調査で検出された。今年度は、西楼の地覆抜取痕跡から東西楼の基壇について検討した。西楼の地覆抜取痕跡は幅60~90cm、深さ25cm程度の溝状で、南面回廊北側の地覆抜取痕跡から連続する。上層礫敷面から掘りこまれ、溝の底が下層礫敷面の上面にわずかにかかることから、I-2期に造営された基壇がI期を通して使用され続けたと考えられる。

まとめ 2001年度から2年間にわたり、大極殿院の四周の回廊の基壇高、大極殿院内外の地形、磚積擁壁の高さや大極殿院の建つ壇上の地形、斜路の形状について検討を加えてきた。これまでの検討を通して、大極殿院造営時に造成された地形の大略が把握できたと思われる。今後さらに細部の検討を重ねることで、大極殿院の復原考察を進展させていきたい。

(山本紀子・金井 健・中島義晴・平澤麻衣子・長尾 充)